

現代日本
文學全集

[45]

石川啄木集



石川啄木集

杉浦非水裝幀

改
造
社
版

昭和三年七月五日印刷
昭和三年七月十日發行

現代日本文學全集 第四十五篇

著者 石川 一

發行者 山本 美

東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者 杉山 愛二

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ三

發兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目六番地

改造社

振替東京八四〇二二三二一
電話芝(43)番番番番番

「石川啄木集」目次

巻頭寫眞(照影)
(筆蹟)

序 (十岐義盛) 二

創作篇

雲は天才である..... 三	葬列..... 六	病院の窓..... 四	天鷲の絨..... 六	二筋の血..... 九	鳥影..... 一〇	赤利..... 一六	足跡..... 一八	葉書..... 一九	道..... 二〇	我等の一團と彼..... 二〇	詩篇..... 二〇	あこがれ..... 二四
----------------	-----------	-------------	-------------	-------------	------------	------------	------------	------------	-----------	-----------------	------------	--------------

散文詩篇

あこがれ以後..... 二九	心の姿の研究..... 二八	呼子と口笛..... 三〇
----------------	----------------	---------------

曠野..... 三四	白い鳥、血の海..... 三七	火星の芝居..... 三九	二人の連..... 三二	祖..... 三三
------------	-----------------	---------------	--------------	-----------

短歌篇

一握の砂..... 三六	悲しき玩具..... 三四	隨筆..... 三六	高調..... 三七
--------------	---------------	------------	------------

手を見つつ..... 三六	秋風..... 三八	綱島梁川氏を弔ふ..... 三五
---------------	------------	------------------

草上枝..... 三九〇	一握の砂..... 三九四	食ふべき詩..... 四〇〇	きれぎれに心に浮んだ感じと回想..... 四〇六	一年間の回顧..... 四二二	巻煙草..... 四二六	性急な思想..... 四三〇	硝子窓..... 四三三	利己主義者と友人との對話..... 四三七	歌のいろ..... 四三三	時代閉塞の現状..... 四三七	平信..... 四四四	書簡百通..... 四四七
--------------	---------------	----------------	--------------------------	-----------------	--------------	----------------	--------------	-----------------------	---------------	------------------	-------------	---------------

(附) 詩、短歌

年譜..... (金田一京助) 六四

序

啄木は實に不遇な短生涯を送つた。物質的に酬いられるところの極めて少なかつたばかりでなく、その思想、藝術の眞價を認められることも、決して當然な程度には達してゐなかつた。然かも彼自身、勿論この兩方面における不遇を歎じなかつたとはいへないが、それがために、その生活の意欲を減失することもなく、その表現の嚮向を轉更することもなく、遂に独自の世界を展開し得たことは、その環境に處して、彼の才情の豊富と意志の強固とによるものといはなければならぬ。

『明日の考察』これ實に我々が今日に於て爲すべき唯一である、さうして又總てである。かう彼は、その晩年の一論文の中に説いてゐる。現代の社會組織、政治組織、家族制度、教育制度、その他百般の事象に互つて、靜かに、熱心に、深く、檢覈し、討究し、批判しなければならぬ、昨日に歸らうとする舊思想家、今日に没頭しつゝある新思想家、それらの人々の前に、新たに明日といふ問題を提示して、これを「時代」の意志と體驗とに統合しなければならぬ。

「君、僕はどうしても僕の思想が、時代より一歩進んでゐるといふ自惚を此頃捨てることが出来ない。」

かうもまた彼は、その書簡の中にいつてゐる。それは決して彼の「自惚」ではなかつた。然かも當時、極めて少數の彼の周囲のみしか、一新しき明日への先驅者たる彼を知らなかつたのである。彼は「明日」に對する欲求と、準備と、計畫とのために、焦慮し、苦闘し、叛逆し、絶望し、諦め、悲しみ、憤り、嘆きつゝ、身を切るやうな物質生活の窮迫の中に、僅かに二十七年間の運命を終つた。彼の全精神は「明日」のために極度の緊張をなしたつたのである。

然しその啄木の「明日」は遂に來た。生前においても詩集『あこがれ』のごときは、當時、天才の一少年詩人として、ロマンチズムの時代に、詩壇の驚異となつたけれども、彼が唯一にしてまた總てであるとした社會認識の強調は、むしろ彼の死後、新潮社の厚意によつて出版することを得た全集三卷その他の効果が、彼への理解を全體的のものとし、その思想藝術を一般民衆のものとなしたことは否み難い。彼の遺友の一人なる予は、當時主としてその遺稿

並に書簡等の蒐集、整理に當つたが、今、新たに、これらの遺作が、現代文學の代表的集約の中に加へられるに至つたことは、彼が生前の意圖と期望の空しくなかつたことを欣幸とせざるを得ない。

歌集によつて、彼は最も多くの其嗚者を得てゐるやうである。然しながら、彼にとつて、作歌は畢竟彼の悲しき玩具に過ぎなかつた。そこに彼の社會意識が窺ひ知られるのである。彼は小説の創作に志してゐた。そして長短種々な創作を試みたが、遂にみづから満足し得られるものは一篇も稿を脱しえず、評論に、詩に、感想文に、彼としてはそれらすべてが「未完成」のまゝに終つたのであるが、それだけ、彼の「時代」に對する野望の強かつたことが察し得られよう。

「石をもて追はるゝ如く、彼が去つた郷里瀧民村の一角には、死後無名青年の徒によつて一大記念碑が建てられ、啄木會と稱して各地に彼を思慕し、あるひは彼を研究考察せんとする團體の無数に設けられた事實もまた、彼が生前の信念と努力の一具現でなければならぬ。

昭和三年六月

土岐善麿

雲は天才である

一

六月三十日、S—村尋常高等小學校の職員室では、今しも壁の掛時計が平常の如く極めて活氣のない懶うげな悲鳴をあげて、——恐らく此時計までが學校教師の單調なる生活に感化されたのであらう、——午後の第三時を報じた。大方今は既四時近いのであらうか。といふのは、田舎の小學校にはよく有勝な奴で、自分が此學校に勤める様になつて既に三ヶ月もなれるが、未だ嘗て此時計がK停車場の大時計と正確に合つて居た例がない、といふ事である。少なくとも三十分、或時の如きは一時間と二十三分も遅れて居ましたと、土曜日毎に該停車場から程遠くもあらぬ郷里へ歸省する女教師が云つた。これは、校長閣下自身の辯明によると、何分此校の生徒の大多數が農家の子弟であるので、時間の正確を守らうとすれば、勢ひ始業時間迄に生徒の集りかねる恐れがあるから、といふ事であるが、實際は、勤勉なる此邊の農家の

朝飯は普通の家庭に比して餘程早い。然し同僚の誰一人、敢て此時計の怠慢に對して、職務柄にも似合はず何等匡正の手段を講ずるものもなかつた。誰しも朝の出勤時間の遅くなるなら格別、一分たりとも早くなるのを喜ぶ人は無いと見える。自分は？ 自分と雖ども實は、幾年來の習慣で朝寝が第二の天性となつて居るので……。

午後の三時、規定の授業は一時間前に悉皆終つた。平日ならば自分は今正に高等科の教壇に立つて、課外二時間の授業最中であるべきであるが、この日は校長から、お互月末の調査もあるし、それに今日は妻が頭痛でヒドク弱つてから可成早く生徒を歸らした、課外は休んで貰へまいかといふ話、といふのは、破格な次第ではあるが此校長の一家四人——妻と子供二人と——は、既に久しく學校の宿直室を自分等の家として居るので、村費で雇はれた小使が欄根の洗濯まで其職務中に加へられ此際常に曉を報ずるといふ内情は、自分もよく知つて

居る。何んでも細君の顔巴の曇つた日は、この一校の長たる人の生徒を遇する極めて酷だ、などいふ噂もある位、推して知るべしである。自分は舌の根まで込み上げて来た不快を辛くも噛み殺して、今日は餘儀なく課外を休んだ。一體自分は尋常科二年受持の代用教員で、月給は大枚金八圓也、毎月正に難有頂戴して居る。それに受持以外に課外二時間宛と來ては、他目には勞力に伴はない報酬、否、報酬に伴はない勞力とも見えようが、自分は露聊かこれに不平を抱いて居ない。何故なれば、この課外教授といふのは、自分が抑々生れて初めて教授をとつて、此校の職員室に末席を讀すやうになつての一週間目、生徒の希望を容れて、といふよりは寧ろ自分の方が生徒以上に希望して開いたので、初等の英語と外國歴史の大體とを一時間宛とは表面だけの事、實際は、自分の有つて居る一切の知識、知識といつても無論貧乏なものであるが、自分は、然し、自ら日本一の代用教員を以て任じて居る。一切の不平、一切の經驗、一切の思想——つまり一切の精神が、この二時間のうちに、機を覗ひ時を待つて、吾が舌端より火筒となつて迸しる。的なきに箭を放つのではない。男といはず女といはず、既に十

三、十四、十五、十六といふ年齢の五十幾人のうら若い胸、それが乃ち火を待つ許りに紅血の油を盛つた青春の火盞ではないか。火箭が飛ぶ、火が油に移る、嗚呼そのハツ／＼と燃え初むる人生の烽火の煙の香ひ！英語が話せれば世界中何處へでも行くに不便はない。たゞこの平凡な一句でも自分に百萬の火箭を放つべき堅固な弦だ。昔希臘といふ國があつた。基督が磔刑にされた。人は生れた時何物をも持つて居ないが精神だけは持つて居る。羅馬は一都府の名で、また昔は世界の名であつた。ルーンは歐羅巴中に響く喇叭を吹いた。コルシカ島があつた。トルストイは生きて居る。ゴルキエが以前放浪者で、今肺病患者である。露西亞は日本より豪い。我々はまだ年が若い。血のない人間は何處に居るか。……、一切の問題が皆火の種だ。自分に火だ。五十幾つの胸にも火事が初まる。四間に五間の教場は宛然然火の洪水だ。自分の骨露はに瘦せた拳が碇と卓子を打つ。と、躍り上るものがある、手を振るものがある、萬歳と叫ぶものがある。完たく一種の暴動だ。自分の眼臉から感激の涙が一滴溢れるや最後、其處にも此處にも聲を擧げて泣く者、

上氣して顔が火と燃え、聲も得出さず革命の神の石像の様に突立つ者、さながらこれ一幅生命反亂の活畫圖が現はれる、涙は水ではない、心の幹をしぼつた樹脂である、油である。火が愈々燃え擴がる許りだ。「千九百〇六年」：此年〇月〇日、E——村尋常高等小學校内の一教場に暴動起る」と後世の世界史が、よしや記さぬまでも、この一場の恐るべき光景は、自分並びに五十幾人のジャコビン黨の胸板には、恐らく「時」の破壊の波浪も消し難き永久不磨の金字で描かれるであらう。疑ひもなく此二時間は、自分が一日二十四時間千四百十分の内、最も得意な愉快な幸福な時間で、大方自分が日々この學校の門を出入する意義も、全くこの課外教授がある爲めであるらしい。然し乍ら此日六月三十日、完全なる「教育の模範」として、既に十幾年の間身を教育勸語の御前に捧げ、口に忠信孝悌の語を繰返す事正に一千萬遍、其思想や穩健にして中正、其風采や質樸無難にして具さに平凡の極致に達し、平和を愛し温順を尚ぶの美德餘つて、細君の尻の下に布かゝるゝをも敢て恥辱とせざる程の忍耐力あり、現に今このS——村に於ては、毎月十八圓といふ村内最高額の俸給を受け給ふ——田島校長

閣下の一言によつて、自分は不本意乍ら其授業を休み、間接には馬鈴薯に目鼻よろしくといふマダム田島の御機嫌をとつた事になる不面目を施し、退いて職員室の一隅に、兒童出席簿と腕み合をし乍ら算盤の珠をさしたり減いたり、過去一ヶ月間に於ける兒童各自の出席簿から、其總數、其歩合を計算して、明日は瘦犬の様な俗吏の手に渡さるべき所謂月表なるものを作らねばならぬ。そのみならず未だしも、成績の調査、缺席の事由、食料攜帶の状況、學用品供給の模様など、名目は立派でも殆んど無意義な仕事が少ないからである。茲に於て自分は感じた、地獄極樂は決して宗教家の方便ではない、實際我等の此の世界に現存して居るものである、と。さうだ、この日の自分は明らかに校長閣下の一言によつて、極樂へ行く途中から、正確なべき時間迄が姿姿の時計と一時間もある。算盤の珠のバチ／＼といふ音、これが乃ち取りも直さず、中世紀末の大冒險家、地獄煉獄天國の三界を跨にかけたダンテ・アリギエリでさへ、聞いては流石に膽を冷した「バベ、サタン、バベ、サタン、アレッペ」といふ奈落の底の聲ではないか。自分は實際、この計算と來

ると、吝嗇な金持の爺が己の財産を勘定して見る時の様に、ニコ／＼ものでは兎でも行れないのである。極樂から地獄！この永劫の宣告を下したものは誰か、抑々誰か。曰く、校長だ。自分は此日程此校長の顔に表れて居る醜悪と缺點とを精密に見極めた事はない。第一に其墓下の八字髭が極めて光澤が無い、これは其人物に一分一厘の活氣もない證據だ。そして其髭が鱧のそれの如く兩端遙かに頤の方面に垂下して居る、恐らく向上といふ事を忘却した精神の象徴はこれであらう。亡國の髭だ、朝鮮人と昔の漢學の先生と今の學校教師にのみあるべき髭だ。黒子が總計三箇ある、就中大きいのが左の目の下に不吉の星の如く、如何にも目障りだ。これは俗に泣黒子と云つて、昔にも自分の一族乃至は平生畏敬して居る人々の顔立には、つひぞ見當らぬ道具である。宜なる哉、この男、どうせ將來好い日に逢ふ氣づかひが無いのだもの。……數へ来れば幾等もあるが、結句、三尋密のといふ續續に歸着した。詰り、一毫の微と雖ども自分の氣に合ふ點がなかつたのである。

この不法なるクーデターの顛末が、自分の口から、生徒控處の一隅で、残りなく我がジャコ

ピン黨全員の耳に達せられた時、一團の時雲あつて忽ちに五十幾箇の若々しき天眞の顔を覆うた。樂園の光明門を閉ざす銀色の雲霧である。明らかに彼等は、自分と同じ不快、不平を一喫したのである。無論自分は、かの細君の頭痛一件まで持ち出したのではない、が、自分の言葉の終るや否や、或者はドンと一つ床を蹴つて一喝した。校長馬鹿ツ。更に他の聲が続いた、鱧ツ。蒲焼にするぞツ。最後に「チェリスト」と極めて陳腐な奇聲を放つて相和した奴もあつた。自分は一瞬の微笑を彼等に注ぎかけて、靜かに歩みを地獄の門に向けた。髧て十五六歩も歩んだ時、急に後の騒ぎが止んだ、と思ふと、「ワン、ツ、スリー、泥鰻——」と、校舎も爲めに動く詰りの園の聲、中には細裂く様な鈴どい女生徒の聲も確かに交つて居る。餘りの事に振向いて見た、が、此時は既に此等革命の健兒の半数以上は生徒昇降口から扉に狂ふ木の葉の如く戸外へ飛び出した所であつた。恐らく今日も、門前に遊んで居る校長の子供の小さい頭には、時ならぬ拳の雨の降つた事であらう。然し控處にはまだ空しく歸りかねて残つた者がある。機會を見計つて自分に何か特別にお話を請求しようといふ執心の輩、髪長き兒

も二人三人見える、——總て十一二人。小使の次男なると、女教師の下宿して居る家の兒と、(共に其緣故によつて、校長閣下から多少大目に見られて居る)この二人は自分の跡から尾いて来たまゝ、先刻からこの地獄の入口に門番の如く立つて、中の様子を看守して居る。

入口といふのは、紙の破れた障子二枚によつて此室と生徒控處とを區別したもので、校門から眞直の玄関を上ると、すぐ左である。この入口から、我が當面の地獄、——天井の極く低い、十疊數位の、汚點だらけた壁も、古風な小形の窓も、年代の故で歪んだ皮椅子も皆一種人生の倦怠を表はして居る職員室に這入ると、向つて四角形に都合四脚の卓子が置かれてある。突當りの眞んだ二脚の、右が校長閣下の席で、左は檢定試験上りの古手の首座訓導、校長の傍が自分で、向ひ合つての一脚が女教師のである。吾等の職員と云つば唯この四人だけ、自分が其内最も末席なは云ふ迄もない。よし百人の職員があるにしても代用教員は常に末席を併せ付かる性質のものであるのだ。御規則とは随分陳腐な洒落である。サテ、自分の後は直ちに障子一重で直室になつて居る。

此職員室の、女教師の昔なる壁の掛時計が

懶うげなる悲鳴をあげて午後三時を報じた時、其時四人の職員は皆各自の卓子に相割據して居た。——卓子は互に密接して居るもの、此時の状態は確かに一の割據時代を現出して居たので。——二十分も續いたハベ、サタン、アレツトといふ苦しげなる聲は、三四分前に至つて、足音に驚いて辛かに啼き止む小甲の蛙の歌の如く、確と許り止んだ。と同時に、老いたる尊とき導師は震なくダンテの手をひいて、更に他の修羅園内に進んだのであらう。新らしき一陣の殺氣颯と面を打つて、別箇の光景をこの室内に描き出したのである。

詳しく説明すれば、實に詰らぬ話であるが、問題は斯うである。二三日以前、自分は不圖した轉機から思附いて、このS——村小學校の生徒をして日常朗唱せしむべき、云はば校歌といつた様な性質の歌を作し、そして作曲した。作曲して見たのが此時、自分が呱呱の聲をあげて以來二十一年、實際初めてであるに關らず、恥かし乍ら自由すると、出来上つたのを聲の透る我が妻に歌はせて聞いた時の感じでは、少々巧い、と思はれた。今でもさう思つて居るが、妻からも賞められた。その夜遊びに来た二三の生徒に、自分でピアノを弾き乍ら教

へたら、矢張賞めてくれた、然も非常に面白い、これからは毎日歌ひますと云つて、歌詞は六行一聯の六聯で、曲の方はハ調四分の二拍子、それが最後の二行が四分の三拍子に變る。斯う變るので一段と面白いですよ、と我が妻は云ふ。イヤ、それはそれとして、兎も角も自分はこれに就いて一點疚しい處のないのは明白な事實だ。作歌作曲は決して盗人、偽善者、乃至一切破廉恥漢の行爲と同一視されるべきではない。マサカ代用教員如きに作曲などをする資格がないといふ規定も無い筈だ。して見ると、自分は不相變正々堂々たるものである、俯仰して天地に恥づる處なき大丈夫である。處が、豈何んぞ圖らんや、この堂々として赤穂たる處が却つて敵をして矢を放たしむるの的となつた所以であつたのだ。ト何も大袈裟に云ふ必要もないが、其歌を自分の教へてやつた生徒は其夜僅か三人(名前も明らかに記憶して居る)に過ぎなかつたが、何んでもジャコピン黨員の胸には皆同じ色——若き生命の淺緑と湧き立つ春の泉の血の色との火が燃えて居て、唇が皆一様に乾いて居る爲めに野火の移りの早かつたものか、一日二日と見るうちに傳唱されて、今日は早や、多少調子の違つた處のないが、高

等科生徒の殆んど三分の二、イヤ五分の四迄は確かに知つて居る。書体みの際などは、誰先立つとなく運動場に一蛇のポロテージ行進が始つて居た。彼は百人近くはあつたらう、尤も野次馬の一群も立交つて居たが、口々に歌つて居るのが乃ち斯く申す新田班助先生新作の校友歌であつたのである。然し何も自分の作つたものが大勢に歌はれたからと云つて、決して取でもない、罪でもない、寧ろ愉快なものだ、得意なのだ。現に其行進を見た時は、自分も何だか氣が浮立つて、身體中何處か斯う擦られる様で、僅か五分間許りではあるが、自分も其行進列中の一人と迄なつて見た位である。……問題の鍵は以後である。

午後三時前——四分、今迄矢張り不器用な指を算盤の上に躍らせて、『ハベ、サタン、ハベ、サタン』を繰返して居た校長田島金藏氏は、今しも出席簿の方の計算を終つたと見えて、やをら頭を擡げて煙管を手持した。ボンと卓子の縁を敲く、トタンに、何とも名狀し難い、狸の難産の様な、水道の栓から草鞋でも飛び出さうな、も少し適切に云ふと、隣家の豚が夏の眞中に感冒をひいた様な奇響——取て響といふ、——が、恐らく仔細に分析して見たら出損

なつた咳の一種でもあらうか、彼の巨大なる喉佛の邊から鳴つた。次いで復幽かなのが一つ。もうこれだけかと思ひ乍ら自分は此時算盤の上には現はれた八四七・九といふ數を月表の出席歩合男の部へ記入しよう、筆の穂を一寸と噛んだ。此刹那、沈痛なる事書寝の夢の中で去年死んだ黒猫の幽霊の出た様な聲あつて、『新田さん。』

と叫んだ。校長閣下の御座掛りである。自分はヒョイと顔を上げた。と同時に、他の二人——首座と女教師も顔を上げた。此一瞬からである、『バベ、サタン、バベ、サタン、アレツ』の聲の喘と許り聞えずなつたのは。女教師は黙つて校長の顔を見て居る。首座訓導はグイと身體をもぢつて、煙草を吸ふ準備をする。何か心に待機へて居るらしい。然り、この僅か三秒の沈黙の後には、近頃珍らしい嵐が吹き出したのだもの。

『新田さん、』と校長は再び自分を呼んだ。餘程厳格な態度を装うて居るらしい。然しお氣の毒な事には、平凡と醜惡とを教育者といふ型に入れて鑄出した此人相には、最早他の何等の表情をも容るべき空虚がないのである。誠に完全な「無意義」である。若し強ひて厳格な態度

度でも装はうとするや最後、其結果は唯對手をして一種の滑稽と輕量な憐愍の情とを起させる丈だ。然し當人は無論一切御存じなし、破鐘の欠伸する様な訥辯は一步を進めた。『貴君に少しお聞き申したい事があります。エート、生命の森の……何でしたつけ、初の句は？』

（と首座訓導を見る。首座は、甚だ迷惑といふ風で黙つて下を見た。）ウン、左様々々、春まだ浅く月若き、生命の森の夜の香に、あくがれ出でて、……とかいふアノ唱歌です。アレは、新田さん、貴君が秘かに作つて生徒に歌はせたのだと云ふ事ですが、眞實ですか。』

『謙です、歌も曲も私の作つたには相違ありませんが、秘かに作つたといふのは謙です。蔭仕事は嫌ひですからナ。』

『デモ、さういふ事でしたつね、古山さん先刻の御話では。』と再び隣席の首座訓導を顧る。古山の顔には、またしても迷惑の雲が懸つた。矢張り黙つた儘で、一閃の偷視を自分に注いで、煙を鼻からフウと出す。

此光景を目撃して、ハ、ア、然うだ、と自分は今一切を直覺した。かの正々堂々赤襟々として俯仰天地に恥づるなき我が歌に就いて、今自分に持ち出さんとして居る抗議は、蓋し泥

鑄金藏閣下一人の頭腦から割出したものではない。完たく古山と合議の結果だ。或は古山の方が當の發頭人であるかも知れない。イヤ然あるべきだ、この校長一人だけでは、如何して這

麼元氣の出る筈が無いのだもの。一體この古山といふのは、此村土着の者であるから、既に十年の餘も斯うして此學校に居る事が出来たのだ。四十の坂を越して矢張五年前と同じく十三圓で満足して居るのでも、意氣地のない奴だといふ事が解る。夫婦喧嘩で有名な男で、（此點は校長に比して稍々温順の美德を缺いて居る。）話題と云つば、何日でも酒と、若い時の經驗談とやらの女話、それにモ一つは釣道樂、と之れ

だけである。最もこの釣道樂だけは、この村で屈指なもので、既に名人の域に入つて居ると自身も信じ人も許して居る。随つて主義も主張もない、（昔から釣の名人になる様な男は主義も主張も持つてない）と相場が極つて居る。随つて當年二十一歳の自分と話が合はない。自分から云はせると、校長と謂ひ此男と謂ひ、營養不足で天然に立枯になつた木の様なもので、松なら枯れても枝振といふ事もあるが、何の風情もない、彼等と自分とは、毎日吸ふ煙草までが違つて居る。彼等の吸ふのは枯れた椽

の葉の粉だ、辛くないが甘くない、香もない、自分のは、五匁三錢の安物かも知れないが、兎に角正真正正の煙草である。香の強い、辛い所に甘い所のある、眞の活々とした人生の煙だ。リリーを一本吸うたら目が廻つて来ましたつけ、と何日か古山の云うたのは、蓋し實際であらう。斯くの如くして、自分は常に此職員室の異分子である、糺ツツである、平和の攪亂者と目されて居る。若し此小天地の中に自分の話相手になる人を求めれば、それは實に女教師一人のみだ。芳紀や、過ぎて今年正に二十四歳、自分には三歳の姉である。それで未だ獨身で、熱心なクリスチャンで、讚美歌が上手で、新教育を享けて居て、思想が先づ健全で、顔は？顔は毎日見て居るから別段目にも立たないが、頬は桃色で、髪は赤い、目は年に似合はず若々しいが、時々判断力が閃め、尋常科一年の受持であるが、誠に善良なナイズである。で、大抵自分の云ふ事が解る、理のある所には屹度同情する。然し流石に女で、それに稍々思慮が有過ぎる傾向があるので、今日の様な場合には、敢て一言も口を出さない。が、其眼珠の輕微なる運動は既に十分自分の味方であることを語つて居る。況んや、現に先刻この女が、自分

の作つた歌を誰から聞いたものか、低聲に歌つて居たのを、確かに自分は聴いたのだもの。さて、自分は此處で、かの歌の如何にして作られ、如何にして傳唱されたかを、詳細かに説明した。そして、最後の言葉が自分の唇から出て、校長と首座と女教師と三人六箇の耳に達した時、其時、カーン、カーン、カーン、と掛時計が、慄氣に叫んだのである。突然アーア、といふ聲が、自分の後、障子の中から起つた。恐らく頭痛で窮つて居るマダム馬鈴薯が、何日もの如く三歳になる女の兒の帯に一條の紐を結び、其一端を自身の足に繋いで、危い處へやらぬ様にし、切爐の側に寝そべつて居たのが、今時計の音に眞晝の夢を覺されたのであらう。「アーア」と再開えた。三秒、五秒、十秒、と恐ろしい沈黙が続いた四人の職員は皆各自の卓子に刺據して居た。この沈黙を破つた一番槍は古山村の木である。「其歌は校長さんの御認可を得たのですか。」「イヤ、決して、斷じて、認可を下した覚えはありません。」と校長は自分の代りに答へて呉れる。自分はケロリとして煙管を銜へ乍ら、幽かな微笑を女教師の方に向いて洩した。古山もまた

煙草を吸ひ初める。校長は、と見ると、何時の間にか赤くなつて、鼻の上から水蒸氣が立つて居る。「どうも、餘りと云へば自由が過ぎる。新田さんは、それあなた新教育も享けてお出でだらうが、どうも、その、少々身勝手過ぎるといふもんで……。」「さうですか。」「さうですか、それを解らぬ筈はない。一體その、エート、確か本年四月の四日の日だつたと思ふが、私が郡視學さんの平野先生へ御機嫌伺ひに出た時でした。さう、確かに其時です。新田さんの事は郡視學さんからお話があつたもんだで、つい私も新田さんを此學校に入れた次第で、郡視學さんの手前もあり、今迄は随分私の方で遠慮もし、寛いにも見て置いた譯であるが、然し、さう身勝手過ぎると、私も一校の司記を預かる校長として、と句を切つて、一寸反り返る。此機を逸さず自分は云つた。「どうぞ御遠慮なく。」「不埒だ。校長を尻とも思つて居らぬ。」この聲は少し高かつた。握つた拳で卓子をドンと打つ、驚いた様に算盤が床へ落ちて、けたたましい音を立てた。自分は今迄校長の斯う活氣のある事を知らなかつた。或は自由自在

「只今何つて居りました處では、と白ツぱく
れて古山が口を出した、『どうもこれは校長さ
んの方に理がある様に、私には思はれますので。
然し新田さんも別段お悪い處もない、唯その校
歌を自分勝手に作つて、自分勝手に生徒に教へ
たといふ、つまり、順序を踏まなかつた點が、
大に、イヤ、多少間違つて居るのでは有るまい
かと、私には思はれます。』
『此學校に校歌といふものがあるのですか。』
『今迄さういふものは有りませんで御座んし
た。』
『今では?』
今度は校長が答へた。『現にさう云ふ貴君が
作つたではないか。』
一問題は其處です。物には順序……
皆まで云はさず自分は手をあげて古山を制し
た。『問題も何も無いぢやないですか。既に私
の作つたアレを、貴君方が校歌だと云つてるぢ
やありませんか。私はこのS——村常高小
學校の校歌を作つた覚えはありませぬ。私は
たゞ、この學校の生徒が日々吟誦しても差支
のない様な、校歌といったやうな性質のものを
試みに作つた丈です。それを貴君方が校歌とい
うて居られる。詰り、校歌としてお認め下さる
のですな。そこで生徒が皆それを、其校歌を歌
ふ。問題も何も有つた話ぢやありませんまい。此
位天下泰平な事はないでせう。』

校長と古山は顔を見合せる。女教師の目には
満足した様な微笑が浮んだ。入口の處には二人
の立番の外に、新しく来たのがある。後の障
子が廻と開いて、腰の邊に細い紐を巻いたなり、
帯も締めず、垢臭い木綿の細かい縞の袴をダラ
シなく着、胸は露はに、抱いた兒に乳房衝せ乍
ら、靜々と立現れた化生の者がある。マダム
馬鈴薯の御入來だ。袴には黒く汗光りする纏
子の半襟がかゝつてある。如何考へても、決し
て餘り有、くない御風體である。針の様に鋭ど
く釣上つた尻尻から、チヨと自分を睨んで、校
長の直ぐ傍に突立つた。若しも、地獄の底の底
で、白髮突の如き瘦せさらぼひたる斃死の狀の
人が、吾兒の骨を諸手に握つて、キリ／＼と
噛む音を、現實の世界で目に見る或形にした

ら、恐らくそれは此女の自分を一睨した時の目
付それであらう。此目付で朝な夕な胸を刺され
る校長閣下の心事も亦、考へれば諒とすべき
點のないでもない。

生ける女神——貧乏の?——は、石像の如く
無言で突立つた。やがて電光の如き變化が此室
内に起つた。校長は、今迄忘れて居た嚴格の態
度を再び裝はんとするものゝ如く、其顔面筋肉
の二三ヶ所に、或る運動を興へた。援軍の到來
と共に、勇氣を回復したのか、恐怖を感じた
のか、それは解らぬが、兎に角或る激しき衝動
を心に受けたのであらう。古山も面を上げた。
然し、もうダメである。攻勢守勢既に其地を代
へた後であるのだもの。自分は敵勢の加はれる
に却つて一層勝誇つた様な感じがした。女教師
は、女神を一目見るや否や、響へ難き不快の霧
に清い胸を閉ざれたと見えて、忽ち俯いた。
見れば、恥辱を感じたのか、氣の毒と思つたの
か、それとも怒つたのか、耳の根迄紅くなつて、
鉛筆の尖でコツ／＼と卓子を啄いて居る。

古山が先づ口を切つた。『然し、物には總て
順序がある。其順序を踏まぬ以上は、一
足飛に陸軍大將にも成れぬ譯です。』成程古
今無類の卓説である。

今度では?』
今度は校長が答へた。『現にさう云ふ貴君が
作つたではないか。』
一問題は其處です。物には順序……
皆まで云はさず自分は手をあげて古山を制し
た。『問題も何も無いぢやないですか。既に私
の作つたアレを、貴君方が校歌だと云つてるぢ
やありませんか。私はこのS——村常高小
學校の校歌を作つた覚えはありませぬ。私は
たゞ、この學校の生徒が日々吟誦しても差支
のない様な、校歌といったやうな性質のものを
試みに作つた丈です。それを貴君方が校歌とい
うて居られる。詰り、校歌としてお認め下さる
のですな。そこで生徒が皆それを、其校歌を歌
ふ。問題も何も有つた話ぢやありませんまい。此
位天下泰平な事はないでせう。』

校長が續いた。「其正當の順序を踏まぬ以上は、たとひ校歌に採用して可いものでも未だ校歌とは申されない。よし立派な免狀は持つて居らぬにしても、身を教育の職に置いて月給迄貰つて居る者が、物の順序も考へぬとは、餘りといへば餘りな事だ。」

云ひ終つて堅く唇を閉ぢる。氣の毒な事には其への字が餘り恰好がよくないので。

女神の視線が氷の矢の如く自分の顔に注がれた。返答如何にと促すのであらう。トタンに、無造作に、といふよりは寧ろ、無作法に束ねられた髪から、櫛が迂り落ちた。敢て拾はうともしない。自分は笑ひ乍ら云うた、

「折角順序々々と云ふお言葉ですが一體如何いふ順序があるのですか。恥かしい話ですが、私は一向存じませぬので。…若し其校歌採用の件とかの順序を知らない爲めに、他日誤つて何處かの校長にでもなつた時、失策する様な事があつても大變です。今教へて頂く譯に行きませぬでせうか。」

校長は苦り切つて答へた。「順序といつても別に面倒な事はない。第一に（と力を入れて）校長が認定して、可いと思へば、郡視學さんの方へ届けるので、それで、ウム、その唱歌が學校

生徒に歌はせて差支がない、といふ認可が下りると、初めて校歌になるのです。」

「ハ、ア、それで何ですな、私の作つたのは、其正當の順序とかいふ手數にかけなかつたので、詰り、早解りの所が、落第なんですな。結構です。作者の身に取つては、校歌に採用されると、されないとは、完た尻の様な問題で、唯自分の作つた歌が生徒皆に歌はれるといふ丈

けで、もう名譽は十分なんです。ハ、ハ、ハ、これなら別に論はないでせう。」

「然し、と古山が繰り出す。此男然しが十八番だ。「その學校の生徒に歌はせるには、矢張り校長さんなり、また私なりへ、一應其歌の意味でも話すとか、或は出来上つてから見せるとかし

たら穩便で可い、と、マア思はれるのですが。」

「のみならず、學校の教案などは形式的で記す必要がないなどと云つて居て、宅へ歸れば、すぐ小説なぞを書くんださうだ。それで教育者の一人とは采れる外はない。實にどうも、…。」

然し、これはマア別の話だが。新田さん、學校には、畏くも文部大臣からのお達で定められた教授細目といふのがありますぞ。算術、國語、地理、歴史は勿論の事、唱歌、裁縫の如きでさへ、チアーンと細目が出来て居ます。私共長年教育

の事業に従事した者が見ますと、現今の細目は實に立派なもので、精に入り微を穿つ、とても云ひませうか。彼は十何年も前の事ですが、私共がまだ師範學校で勉強して居た時分、其頃で

早や四十五圓も取つて居た小原銀太郎と云ふ有名な助教先生の監督で、小學校校教授細目を編んだ事がありますが、其時のと今のと比較して見るに、イヤ實にお話にならぬ、冷汗です。で、

その、正當の教育者といふものは、其完全無缺な規定の細目を守つて、一毫亂れざる底に授業を進めて行かなければならない、若しさもなれば、小にしては其教へる生徒の父兄、また、

高い月給を支拂つてくれる村役場にも甚だ濟まない譯、大にしては我が大日本の教育を亂すといふ罪にも坐する次第で、完た此處の所が、

我々教育者にとつて最も大切な點であらうと、私などは、既に十年の餘も、——此處へ来てからは、まだ四年と三ヶ月にしか成らぬが、——努力精勵して居るのです。尤も、細目に無いものは一切教へてはならぬといふのではない。そ

こはその、先刻から古山さんも頻りに主張して居られる通り、物には順序がある、順序を踏んで、認可を得た上なれば、無論教へても差支がない。若しさうでなくば、只今諄々と申した

事、

様な仕儀になり、且つ私も校長を拜命して居る以上は、私に迄責任が及んで来るかも知れないのです。それでは、何うもお互に迷惑だ。のみならず再校の面目をも傷ける様になる。」

『大變な事になるんですね。』と自分は極めて洒々たるものである。尤も此お説法中は、時々失笑を禁じえなだったので、それを噛み殺すに不些少骨を折つたが、『それでつまり私の作つた歌が其完全無缺なる教授細目に載つて居ないのでせう。』

『無論ある筈がないでサア。』と古山。

『ない筈ですよ、二三日前に作つた許りですもの。アハ、ハ、ハ。先刻からのお話は、結局あの歌を生徒に歌はせては不可、といふ極く明瞭な一事に歸着するんですね。色々な順序の枝だの細目の葉だのを切つて了つて、肝膽を披露した所が、さうでせう。』

これには返事が無い。

其細目といふ矢筈敷お爺さんに、代用教員は教壇以外にて一切生徒に教ふべからず、といふ事か、さもなくば、學校以外で生徒を教へる事の細目とかいふものが、ありますか。』と校長は怒つた。

『それなら安心です。』

『何が安心だ。』

『だつて、さうでせう。先刻詳しくお話しした通り、私があの歌を教へたのは、二三日前、乃ちあれの出来上つた日の夜に、私の宅に遊びに来た生徒只の三人だけになのですから、何も私が細目のお爺さんにお目玉を頂戴する筈はないでせう。若しあの歌に、何か危険な思想でも入れてあるとか、又は生徒の口にすべからざる語でもあるなら格別ですが、：。イヤ餘程心配しました。』

全勝の花冠は我が頭上に在焉。敵は見ん事鐵筋以北に退却した。劍折れ、馬斃れ、矢弾が盡きて、戰の續けられる道理は昔からないのだ。

『私も昨日、あれを書いたのを衆さん(生徒の名)から借りて寫したんですよ。私なんぞは何も解りませんけども、大層もう結構なお作だと思ひまして、實は明日唱歌の時間にはあれを教へようと思つてたんでしたよ。』
これは勝誇つた自分の胸に、發止と許り投げられた美しい光榮の花環であつた。女教師が初めて口を開いたのである。

二

此時校長田島金藏氏は、感極まつて殆んど落涙に及ばんとした。初めは怨めしさうに女教師の顔を見て居たが、フイと首を廻らして、側に立つ垢臭い女神、頭痛の化生、繻子の半襟をかけたマダム馬鈴薯を仰いだ。平常は死んだ源五郎船の目の様に鈍い眼も、此時だけは激戦の火花の影を猶留めて、極度の恐縮と敬願の情にやゝ、濕みを持つて居る。世にも弱き夫が渾身の愛情を捧げて妻が一顧の哀憐を買はむとするの圖は正に之である。然し大理石に泥を塗つたやうな女神の面は微塵も動かなんだ。そして、唯一聲、『フン、』と云つた。嗚世に誰か此のフンの意味の能く解る人があらう。やがて身を屈めて、落ちて居た櫛を拾ふ。抱いて居る兒はまだ乳房を放さない。随分強慾な兒だ。

古山は、野卑な目付に憤怒の色を混へて自分を凝視して居る。水の面の白い浮標の、今沈むかと気が氣でない時も斯うであらう。我が敬慕に値する善良なる女教師山本孝子女史は、いつの間にかまた、パペ、サタン、を初めて居る。入口を見ると、三分刈のクリ／＼頭が四つ、朱鷺色のリボンを結んだのが二つ並んで居た。

自分が振り向いた時、いづれも愕然とした。中に一人、女教師の下宿してる家の榮さんといふのが、大きい眼をバチ／＼とさせて、一種の時鐘祝詞を自分に送つて呉れた。珍らしい精巧な少年である。自分も返電を行つた。今度は六人の眼が皆一度にバチ／＼とする。

不意に、若々しい、勇ましい合唱の聲が聞えた。二階の方からである。

春まだ浅く月若き

生命の森の夜の香に

あくがれ出でて我が魂の
夢むともなく夢むれば、……

あ、此歌である、日露開戦の原因となつたは。

自分は颯と電氣にでも打たれた様に感じた。同時に梯子段を踏む騒々しい響がして、聲は一寸亂れる。降りて来るな、と思ふと早や姿が現はれた。一隊五人の健兒、先頭に立つたのは了輔と云つて村長の長男、春こそ高くないが校内

第一の腕白者、成程も亦優等で、ジャコピン黨の内でも最も急進的な、謂はゞ爆弾派の首領である。多分二階に人を避けて、今日以外を休ま

された復讐の秘密會議でも開いたのであらう。あの元氣で見ると、既に成算胸にあるらしい。

願くは復以前の様に、深夜宿直室へ磔の雨を

注ぐ様な亂暴はしてくれねばよいが。一隊の健兒は、春の曉の鐘の様な牙えんぐした聲を張り上げて歌ひつゞけ乍ら、勇ましい歩調で、先づ廣い控處の中央に大きい圓を描いた。ト見ると、今度は我が職員室を目覚めて堂々と練つて来るのである。

「自主」の劍を右手に持ち、左手に翳す「愛」の旗、

「自由」の駒に跨がりて

進む理想の路すがら、

今宵生命の森の蔭

水のほとりに宿かりぬ。

そびゆる山は英傑の

跡を形ふ墓標、

音なき河は千載に

香る名をこそ流すらむ。

此處は何處と我問へば、

汝が故郷と月答ふ。

勇める胸の嘶くと

思へば夢はふと覺めぬ。

白羽の甲銀の楯

皆消えはてぬ、さはあれど

ここに消えざる身ぞ一人
理想の路に佇みぬ。

雪をいただく岩手山
名さへ優しき女神の

山の間を流れゆく
千古の水の北上に

心を洗ひ……

と此處まで歌つた時は、丁度職員室の入口に了輔の右の足が踏み込んだ處である。歌は止んだ。此數分の間、室内に起つた光景は、自分

は少しも知らなんだ。自分はたゞ一心に、歩んでくる了輔の目を見詰めて、心では一絲に歌つて居たのである。——然も心の聲のあらん限りをしぼつて。

不圖氣がつくと、世界滅盡の大活劇が一秒の後に迫つて来たかと思つた。校長の顔は盛んな山火事だ。そして目に見える程ブル／＼と震へて居る。古山は既に椅子から突立つて、飢饉に逢つた仁王様の様に、拳を握つて矢張震へて居る。

青い太い静脈が顔一杯に脹れ出して居る。榮さんは了輔の耳に口を寄せて、何か囁いて居る。了輔は目を象の鼻穴程に睜つて熱心に聞いて居る。どちらか云へば生來太い方の聲な

ので、返事をするのが自分にも聞える、

『……ナニ、此歌を？……ウム……勝つたか、ウム、然うさ、然うとも、見たかつたナ……飲まないいつて、酒を？……然し赤いな、赤鯉ッ。』

最後の聲が稍々高かつた。古山は激した聲で、

『校長さん。』

と叫んだ。校長は立つた。轉機で椅子が後に倒れた。細君は未だ動かないで居る。然し其顔の物凄しい事。

『彼方へ行け。』

『彼方へお出なさい。』

自分と女教師とは同時に斯う云つて、手を動かし、目で知らせた。了輔の目と自分の目と合つた。自分は目で強く壓した。

了輔は遂に驅け出した。

そびゆる山は英傑の跡を弔ふ墓標、

と歌ひ乍ら。他の兒等も皆彼の跡を追うた。

『勝つた先生萬歳』

と鬨の聲が聞える。五六人の聲だ。中に、量のある了輔の聲と、榮さんのソプラノなのが際立つて響く。

自分の目と女教師の目と礫と空中で行き合つ

た。その目には非常な感激が溢れて居る。無誦自分に不利益な感ぜてない事は、其光り様で解る。——恰も此時。

恰も此時、玄關で人の聲がした。何か云ひ争うて居るらしい。然し初めは、自分も激して居る故か、確とは聞き取れなかつた。一人は小使の聲である。一人は？ どうも前代未聞の聲の様だ。

『……何云つたつて、乞食は又ツ眼乞食だんべい。今も云ふ通り、學校はハア、乞食などの來る所だ。ねエだよ。校長さアが何日も云うとるだ、辭がつくだで、乞食が來たら、何ねエな奴でも追拂つてしまへつて、さつさと行かつしやれ、お互に無駄な暇取るだアよ。』と小使の聲。

凜とした眼のある若い男の聲が答へる。『それア僕は乞食には乞食だ、が、普通の乞食とは少々格が違ふ。ナニ、強請だんべいつて？ ヨシヨシ、何でも可いから、兎に角其手紙を新田といふ人に見せてくれ。居るつて今云つたぢやないか。新田白牛といふ人だ。』

ハテナ、と自分は思ふ。小使がまた云ふ、

『新田耕助先生ちふ若けエ人なら居るだが、はくさうなんて可笑しな奴ア一人だつて居ねエだよ。耕助先生にア乞食に親類もあんめエ。間違

エだよ。コレア人違エだんべエ。之エ返しますだよ。』

『困つた人だね、僕は君には些とも用がないんだ。新田といふ人に逢ひさへすれば可。ね、ただ新田君に逢へば満足だ、本望だ。解つたか、君……お願ひだから其手紙を、頼む……これでも不可といふなら、僕は自分で上つて行つて、尋ねる人に逢ふ迄サ。』

自分は此時立つて行つて見ようかと思つた。が、何故か敢て立たなかつた。立派な美しい、堂々たる、廣い胸の底から響りなく出る様な聲に完たく酔はされたのであらう。自分は、何故といふ事もなく、時々寫眞版で見た、子供を抱いたナポレオンの顔を思出した。そして、今玄關に立つて自分の名を呼んで逢ひたいと云つて居る人が、屹度其ナポレオンに似た人に相違ないと思つた。

『そ、そねエな事して、何うなるだアよ。俺ハア校長さアに叱られ申すだ。ぢやア、マア待つて居さつしやい。兎に角此手紙だけはあの先生に見せて来るだアから。……人違エにやきまつてるだア。俺これ迄十六年も此學校に居るだアに、まだ乞食から手紙見せられた先生なんざア一人だつて無エだよ。』

自分の心は今一種奇妙な感じに捉へられた。周圍を見ると、校長も古山も何時の間にか腰を掛けて居る。マダム馬鈴薯はまだ不動の姿勢を取つて居る。女教師もとの通り。そして四人の目は皆、何物かを期待する様に自分に注がれて居る。其昔、大理石で疊んだ壯麗なる演戲場の殘敷から、罪なき赤手の奴隷——完たき無力の選手——が、暴力の權化なる巨獸、換言すれば獅子と呼ばれたる神權の帝王に對して、如何程の抵抗を試み得るものかと、興ある事に眺め下した人々の目付、その目付も斯くやあつたらうと、心の中に想はるる。

村でも「御様」と併名せらるる好人物の小使——忠太と名を呼べば、雨の日も風の日も、『アイ』と返事をする——が、厚い唇に何かブツブツ呟やき乍ら、職員室に這入つて来た。

『これ先生さまに見せて呉れ云ふ乞食が来てますだ。ハイ。』

と、變な目をしてオツ／＼自分を見乍ら、一通の封書を卓子に置く。そして、玄關の方角に指さし乍ら、左の目を閉ぢ、口を歪め、ヒョツトコの眞似をして見せて、

『變な奴ですが。お氣を付けさつしやい。俺、様々斷つて見ましただが、どうしても聽かね

エだ。』

と小言で喋く。

黙つて封書を手に取り上げた。表には、勢のよい筆太のメが殆んど全體に書かれて、下に見覚えのある亂暴な字體で、薄墨のあやなくに「八戸ニテ、朱雲」の六字。目付はない。

『ああ、朱雲からだ！』と自分は思はず聲を出す。裏を返せば、『岩手縣岩手郡S——村尋常高等小學校内、新田白牛様』と先以て眞面目な行書である。自分は或事を思ひ出した、が、兎も角も急いで封を切る。すべての人の視線は自分の瘦せた指先の、何かは知れぬ震ひに注がれて居るのであらう。不意に打出した胸太鼓、若き生命の轟きは電の如く全身の血に波動を送る。震ふ指先で引き出したのは一枚の半紙、字が大きいので、文句は無論極めて短かい。

爾後大に疎遠、失敬。

これだけで二行に書いてある。

石本俊吉此手紙を持つて行く。君は出来るだけの助力を此人物に與ふべし。小生生れて初めて紹介状なる物を書いた。

六月二十五日

新田耕サン

天野朱雲拜

そして、上部の餘白へ横に
(獨眼龍ダヨ)と一句。

世にも無作法極まる亂暴な手紙と云つば、蓋し斯くの如きものの謂であらう。然も之は普通の消息ではない。人が、自己の信用の範圍に於て、或る一人を、他の未知の一人に握手せしむる際の、謂はば、神前の祭壇に讀み上ぐべき或る神聖なる告文、と云つた様な紹介状ではないか。若し斯くの如き紹介状を享くる人が、温厚篤實にして萬中庸を尙ぶ世上の士君子、例へば我が校長田島氏の如きであつたら、恐らく見もせぬうちから玄關に立つ人を前門の虎と心得て、いざ狼の立塞がぬ間にと、草裏片足で真門から逃げ出さぬとも限らない。然も此一封が、嘗てこのS——村に呱呱の聲を挙げ、この學校——尤も其頃は校舎も今の半分しか無く、教師も唯の一人、無論高等科設置以前の見すばらしい單級學校ではあつたが、——で、矢張り穩健で中正で無愛想で、規則と順序と年末の賞與金と文部省と細君とを、此上なく尊敬する一教育者の手から、聖代の初等教育を授けられた日本國民の一人、當年二十七歳の天野大助が書いたのだと知つたならば、抑々何の辭を以て其驚愕の意を發表するであらうか。實際